

スペシャルインタビュー

Academic Milestones - 学びを究める力

2020/10/30 更新

Vol.064 神田外語大学 特任講師

上原雅子先生

言語は「伝える」ためにある

「伝えたい」という気持ちを込めて

自分の意見を発言してみよう

上原 雅子 (うえはら まさこ)

東京都生まれ。神田外語大学英米語学科特任講師。NPO 法人「国際人をめざす会理事」、一般社団法人「英語落語協会」理事。King's College, London(応用言語学)修士課程修了。駐ジョージア大使夫人として、1年の半分ちかくをジョージアに滞在しながら、ジョージアの魅力を日本に伝えるべく活動中。本業は大学英語講師で、特に TOEFL®指導、4技能統合型授業の推進、アウトプット系の指導法に注力。著書に『Speaking スキルが高まる必修ポイント 8』『Writing スキルが高まる必修ポイント 10』(共にくもん出版)など。

英語教育改革の最中にある今、柱となっているのが「読む」「聞く」「書く」「話す」の英語4技能を統合的に学ぶことです。現在大学で英語を教える上原雅子先生は、かねてより4技能統合型の英語教育の推進に注力、TOEFL®の指導にも精力的に取り組まれています。一方では高座名「鹿鳴家一輪」としての「英語落語」の実践者でもあり、さらにはロシアやトルコに挟まれたコーカサス地方の国・ジョージアの日本大使夫人という顔もお持ちです。「英語嫌いの時期もあった」と振り返る上原先生に、英語力の伸ばし方や TOEFL® の意義のほか、英語落語やジョージアの魅力など、幅広い話題でお話をうかがいました。

英語指導者、英語落語実践者、駐ジョージア大使夫人

多彩な顔を持ち、国内外を駆け巡る



私は現在、大学で *TOEFL iBT*®をはじめ、4 技能統合型の英語教育の推進・指導をしています。「4 技能統合型」というのは、「読む」「聞く」「書く」「話す」の4 技能を、それぞれ伸ばそうとするのではなく、英語で読んだり聞いたりしてインプットしたものを、自分の中で咀嚼し、自分の言葉で話したり書いたりしてアウトプットする、という学び方です。こうしたことは、母国語ではごく自然にできるコミュニケーションですが、外国語では4 技能を分けてしまいがちです。

大学で教えるほか、8 年前からは英語落語をやり始め、国内外で公演しています。じつは落語は当初、英語教育のツールとして活用しようと考えていました。落語は感情をのせて話すことによって人に伝わる話芸です。ですから、「英語で伝える」ことに役立つのではないかと、以前から興味を持っていました。

指導で使うならよく知らないかと…と、たまたま身近に英語落語を教えている同僚がいたのでその教室に入ったところ、自分で演じることにはまってしまいました（笑）。外国の方に公演すると、体をよじって笑ってくれるなど反応がとてもよく、こちらも楽しくなり、相乗効果で盛り上がるんです。今では高座に上がることが生活の一部になっています。

もうひとつ、3 年ほど前からは、日本とジョージアをつなぐ活動もしています。ジョージアは、ヨーロッパ・ロシア・中東を結ぶ十字路に位置する国です。夫が駐ジョージア大使であるため、大学の授業がないときには現地に行き、ジョージアで活躍する各界の要人や専門家などとネットワーキングをしたり、2 国の文化を互いに紹介する活動をしたりしています。

ジョージアは、四方を大国に囲まれ、北海道ほどの国土に数百万人が住む小さい国。旧ソ連時代は自治国としてソ連の統治下にありましたが、建国およそ 2000 年にもおよぶ歴史があります。私は現地では

英語でコミュニケーションをとっていますが、公用語はジョージア語。どこの語族にも属さない言語学的に珍しい言語です。空手や柔道剣道などの武道がさかんな親日国で、ホスピタリティあふれるとても魅力的な国です。ワイン発祥の地でもあるのですよ。

TOEFL®シリーズを勧める3つの理由



私が4技能を統合して教えることがとても重要だと気づいたのは、20年ほど前、夫の仕事の関係でアメリカに滞在していたときです。私は学生時代から英会話学校で教えていたこともあり、現地の大学でTEFL (Teaching English as a Foreign Language : 英語を母国語としない人に、英語を教える英語教授法) のコースを履修しました。ここでいろんな教授法に触れ、4技能統合型も学びました。帰国後、当時の日本では統合型の教授法はメジャーではなかったのですが、ちょうどその頃 TOEFL iBT®が登場。以来、統合型の問題が出題される TOEFL iBT®の指導に注力するようになりました。

TOEFL®は、「英語圏の大学で学ぶ英語力があるかどうか」を測るテストです。力を伸ばすきっかけになるのはもちろん、世界基準で自分の英語力のレベルがわかるので、留学目的の人だけが受験するのはもったいない。多くの人に活用してほしいと思っています。

現在は TOEFL iBT®のほか、小中学生向けの TOEFL Primary®、中高生向けの TOEFL Junior®の大きく3種類がありますが、当初は難易度の高い TOEFL iBT®だけでした。日本の中高生には難しく、もっとや

さしいレベルができて欲しいと思っていたので、*TOEFL Primary*®と*TOEFL Junior*®ができたときは、とても喜ばしく感じました。

私が *TOEFL* シリーズを勧める理由は 3 つあります。まず、複数スキルを統合して回答しなくてはならない点です。聞き取ったり読んだりした内容を要約したうえで、「話す」「書く」など、実際の生活を疑似体験するような問題形式になっているということです。

2 つめは、アカデミックな教材、つまりアメリカの教科書を使っている点です。*TOEFL iBT*®では、大学の教養課程で使う教科書を題材にしています。そのため難易度が高いのですが、*TOEFL Primary*®、*TOEFL Junior*® は小中学校の教科書を題材にしています。私は、小学校で学ぶ内容を英語でマスターできれば、ほとんどの会話に困ることはないと思っていますので、十分だと思います。

3 つめは、このテストが「日本で」ではなく、「現地で」つくられていることです。アメリカ人にとって当たり前の話題を選んでいるので、日本人には「あれ？」と感ずることもありますが、そうした「国が違えば見方が違う」という気づきを得るのは大事なことだと思います。

やさしい英語をたくさん聞いて

「伝えよう」という気持ちで音読するのが上達のコツ



本年度から小学校 5,6 年生で英語が教科化されましたが、私自身は、小学校で教科化され、言語活動として英語を学び、その後に知識として文法を学習するのは良い流れだと思いますし、必要な改革だと思っています。言葉はあくまでも手段なので、「英語を使って何をしたいのか」に早く気づくことがさらに大事で、早い時期に英語に触ればその可能性も高まるからです。目標によって学び方も違ってきます。

大学で教えていると、現在の日本の高校ではいろいろな教え方があるのだなと実感します。従来のように訳読中心の学校もあれば、コミュニケーション重視の学校もあり、そのため文法がわからない学生がいたりもします。コミュニケーション重視の方向性は間違っていないと思いますが、文法も避けて通れません。文法的に正しくないと、真意を伝えられないからです。言葉は「伝える」ためがあるので、音読をする際にも「ただ読む」のではなく「伝えよう」という気持ちで読むことが英語力を伸ばすポイントです。

公文式の英語学習でいいなと思うことのひとつは、音読を取り入れている点です。その際も、「ただ読む」のではなく、「先生に話の内容を伝えよう」という気持ちで読めば、効果が上がるでしょう。

私は 4 技能の中でもリスニングが大事だと思っています。リスニングは「音が聞き取れる」だけではなく、内容を即座に理解しなくてはなりません。音や単語、構成も自分の中に取り込んで咀嚼しなくてはならず、総合力が試されるからです。

ところが、リスニングに時間をかける人が少ないと感じます。学校で時間を割けないという事情もあるかもしれませんが、リスニングは本来自分でできることなので、積極的に取り組んでほしいですね。その意味では、公文式で使われている「E-Pencil」はよい教材だと思います。正しい発音を小さいときから知ることができますし、「聞く」ことは手軽でないとなかなか続かないからです。

ただ、自分の英語レベルより高い“理解できていない英語”を聞き流してはなかなか上達しません。時間的に長く聞くのではなく、ひとつの話を深く聞くこと、スクリプトを用いて聞き取れていない原因を探り、意味の分かったものを聞くことが大切です。「わかった」からとすぐに次のレベルに進むのではなく、その「わかった」話を何回も繰り返し聞いて、「わかった」という成功体験を積み重ねることがポイントです。

つまり、英語力アップの近道は、自分にとって「やさしい」と思う英語を、聞いたり読んだりする“量”を増やすこと。そして、読んだり聞いたりした内容を、人に「伝えよう」という気持ちで、書いたり話したりしてください。

自分の意見を「伝える」コツとしては、最初から「私はこう思う」というのではなく、何かと一緒に読んだり聞いたりして相手との話の土台をつくって、その上で自分の意見を相手に伝える、というプロセスが大切だと思います。

英文記事を読み「日本以外の違う価値観がある」と気づいたことがバネに



こうして現在、英語指導に携わっている私ですが、自分が教える立場になるとは思ってもいませんでした。私が英語に出合ったのは、小学校に入った頃、母が自宅で英語教室を開いたのがきっかけです。「ぐりとぐら」などの英語版の絵本を覚えて、皆で劇や紙芝居をするという教室でした。いま、英語落語をしている私ですが、小さい頃からそんなことをしていたのだと、ときどき思い出します。

育った家庭では欧米の方の出入りも多く、英語が身近ではありました。そのため、「英語は得意でしょ？」といわれることが多かったのですが、入り口がコミュニケーションだったため、中学に入ってから文法が苦手になってしまい、じつは英語の授業にあまりいい思い出はありません。

ですからいま、「コミュニケーション重視で学習してきたために文法が苦手」というお子さんの状況や気持ちがよくわかります。今ではもちろん文法も楽しく教えていますし、だからこそ、そうした人に適切な教え方ができていると思っています。

「英語が嫌い」と思うこともあった私が、なぜここまで英語に関わり続けられたかという点、『TIME』や『Newsweek』などの英文記事を読んでいると、日本では得られない情報に接することができること

に気づいたからです。理不尽なことがあっても、「これは他の国ではたいしたことないんだ。理不尽だ
と思う私の感覚は間違っていないんだ」という妙な安心感がありました。「何が書かれているのか知り
たい」と思うようにもなりました。

就職してからは、海外を担当する部署に配属され、英語を使って仕事をするように。そこで英語の必要
性を実感しました。結婚を機に退職した後は、学生時代に英会話学校で教えていたこともあり、子育て
をしながらあちこちで、子どもから大人まで、さまざまな人に英語を教えていました。

やがて夫のアメリカ転勤に伴い、子連れで渡米。そこで前述した TEFL コースに通って最新の教授法を学
んだことが、私の転機になりました。教え方が変わり、その後ロンドンの大学院で応用言語学修士課程
を修了し、大学で指導するようになり今に至っています。

ジョージアから学ぶ「グローバル」とは？

「国同士、影響し合う」感覚を持つ



近年よく、「グローバル」「グローバル化」がいわれ、関連して英語の必要性も話題になります。そう
した中、駐ジョージア大使の配偶者として、ジョージアと日本をつなぐ活動をしているのは、「日
本にいとグローバル化を感じにくい」という自覚を持つことが大切」ということです。

日本とジョージアの大きな違いは、「隣国に接しているかどうか」です。ジョージアのみならずヨーロッパは、自分の祖母の時代には自国だった場所が、いまは他国になっている、といったことも珍しくありません。周囲を大国に囲まれたジョージアは、攻められ、大国の支配下に入るたびにそれらの国の言葉を覚えなくては生き延びることができませんでした。生活は、常に隣国と影響し合いながらあるわけです。

今、ジョージア国内で公用語でもない英語を流暢に話す人が多いのは、そうした歴史のもと、言語を学ぶことに抵抗がなく、それにより得られることの大きさを理解しているからでしょう。また学校教育以外に、英語で映画、アニメなどが手軽にみられるなど、英語に接する環境が多くあることも影響しています。

インターネットが発展したいま、日本でもそうした学びは可能なのに、英語が流暢な人はそう多くいません。ジョージアのように隣国から攻められることもなく「英語ができなくてはい」という危機感がないため、必死に学ぶ必要が日本にはないのです。

「島国だから仕方ない」「わかる人だけわかればいい」という意見もあるかもしれませんが、そうも言っていないと思います。世界の多くの国では隣国と影響し合って生活をし、英語で意思疎通ができています。その中に入ろうとするならば、日本人もそれだけ英語を理解しなくてはなりません。「影響し合う」という感覚を持つことも必要です。さらに、「知識を英語でインプットして、それに対して自分の意見を言う」ことができれば、本当のグローバル人材になるのではないかと思います。コロナ禍が収まったら

ぜひ、短期間でも国外に出てみてください。英語を学ぶだけでなく、「日本とは違う価値観で動く国がある」ことを実感してほしいと思います。

ところで、よく「海外で生活すれば英語ができるようになる」と考える人がいますが、英語に限らず、どこにいても、何ごとも身につくかどうかは自分の努力次第です。その意味ではコロナ禍でも日本にいても、できることはたくさんあります。人には自分に合った学び方があるので、「映像を観る」「音で聞く」など、自分がおもしろいと思う勉強法を見つけて、大人も英語を学び直してはいかがでしょうか。

「否定的な言葉」はなるべく控える

「自信を伸ばす」だけでなく「自信を壊さない」心掛けを



私が大切にしてきたのは、「否定的な言葉はなるべく使わないこと」です。アメリカで子育てをしていた頃、なぜ子どもたちはあんなに自信があるのかと不思議に感じていました。あるとき、それはアメリカのお母さんたちは、子どもに対して否定的な言葉を使わないからだと気づきました。

子どもでも大人でも自信を持つことは簡単ではなく、「自信を持ちなさい」と言ってもすぐに持てるものではありません。自信とは、人から褒められたり認められたり点数が上がったりと、小さな成功体験

を積み重ねてできるものです。否定的な言葉は、そうしてできた自信を、一瞬で崩してしまいます。大人も子どももそのことをもっと意識して前向きな言葉を選んで話さなければと思います。言葉はそれだけ力があるのですから。

子どもはとくに「親がわかってくれる」ことが、人生においての一番の原動力です。その親が否定的な表現を使わないだけでも、子どもの自信はもっと伸びるのではないかと思います。「子どもの自信を伸ばす」のも大切ですが、「子どもの自信を壊さない」環境を私たちは作っていかねばいけないと思います。

お子さんに伝えたいのは、「好きなことにトライすること」。それから「自分の意見を具体的に、建設的に発言すること」です。大学で時々自分の意見を言うてはいけないと思っている学生がいて驚きます。発言したとしても、例えば「世の中をよくしたい」という具体性のない事は言えるのですが、「では、そのためにあなたは何をやる？」と問うと、答えに詰まってしまうのです。英語では具体例を挙げなくては「考えていないこと」と見なされてしまいます。普段から「自分は具体的に何が出来るか、何に貢献できるか」を考えることを習慣化するといいですね。

私自身は、これからも子供から社会人まで年代問わず多くの人の英語の指導にかかわっていきたくと思っています。今までの経験を役立て、いかに英語で情報を得、コミュニケーションをとり、相手に正しく自分の意見を発信できるようになれるか、という観点で指導を続けたい。TOEFL や英語落語を活用することもできます。4 技能をフルに使って英語を学べるよう、学習者に寄り添っていければと思います。主役は学ぶ人たちですから。

英語落語については、コロナ禍を抜けたら海外での公演の機会を増やしたいですね。ちなみに現在の持ちネタは17です。こちらを増やしていきたいし、そもそもの目的だった英語教育にも活かしていきたい。

現在小学生向けに英語落語の本を出す企画も進行中です。

またジョージアと日本との交流に微力でも尽力できればと思います。ジョージアは知れば知るほど好きになる素敵な国です。“コロナ禍が収まったら行きたい国”のリストに是非加えてくださいね。

【以上、「KUMON」HP スペシャルインタビューからの抜粋記事】